

「第2回 星なかまの集い～天文楽サミット～」

2012年1月29日

移動式プラネタリウムを活用した緩和ケアサロンの効果 緩和ケアと天文とのコラボレーションの有用性



医療法人社団 にいくにないかい 新国内科医院 がん看護専門看護師 宇野さつき
神戸大学病院緩和ケアチーム 太田垣加奈子 西村善博
明石市立天文科学館 井上毅、明石市立天文科学館星の友の会

緩和ケアとは、がんをはじめ生命を脅かす疾患に直面している患者・家族に対して痛みなどの身体的な問題だけでなく心理的、社会的、霊的な苦痛を軽減し、生活の質・生命の質(QOL)を改善するためのアプローチである(WHO2002年)。病気によって予後が限られていても、医療者だけでなく多職種で連携をとり、最期まで「今をよりよく生きる」ことへの支援が大切になる。

今回、医療機関と明石市立天文科学館とが共同し、緩和ケアを必要としているがん患者と家族を対象に神戸大学病院内で移動式プラネタリウムを活用した緩和ケアサロンを5回実施した。実施後に行った参加者とスタッフへのアンケート結果をもとに、このような取り組みの効果と意義について検討を行った。

参加者はのべ患者・家族約120名で、年齢は10～80歳代と幅広く、車いすやストレッチャーでの参加、点滴や酸素吸入しながらの参加者もいた。感想は「良かった」が90%を超え、プラネタリウムによって「病気のことを忘れて楽しめた」「感動できた」「昔を思い出した」などの他、「家族・友人との時間を楽しめる」「他者との交流で気持ちが和む」場となっていた。またスタッフも「参加者の笑顔を見て元気をもらう」等と感じていた。

プラネタリウムを通して「宇宙を感じる」非日常的な体験が、がん患者・家族の心のケアにつながり、他者との交流により病状・年齢・立場を問わず相互にエンパワーされ、患者・家族のQOL向上やスタッフケアの場の提供にもつながることが示唆された。

今後もそれぞれの専門分野を活かしたコラボレーションを行うことで、一人でも多くの患者・家族の役に立つことができると考えている。

